

日本近代文学大事典

第五卷
新聞・雑誌

日本近代文学館



日本近代文学大事典 第五卷
昭和五十二年十一月十八日 第一刷発行

編者 日本近代文学館
小田切進

発行者 野間省一

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 大日本製本株式会社

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二一二

郵便番号 一一二

振替 東京 八一三九三〇

電話 東京(九四五)一一一一(大代表)

落丁本・乱丁本はお取りかえいたしません
©一九七七年 日本近代文学館

Printed in Japan

0591-265751(0) (文事)

内部交流

S68/41 (日6-2/118-5)

日本近代文学大事典 第五卷

BT000645

日本近代文学大事典

第五卷
新聞・雑誌

日本近代文学館・編

講談社

あ

あ お

「亞」。詩雑誌。大正一三・一一ノ昭和二・一二。全三五冊。亞社發行。大連に住む安西冬衛とその地に帰省したりする学生の北川冬彦、富田充、城所英一を同人として創刊された。第三号からは安西と滝口武士の二人だけが同人となり、それに第二四号から尾形龜之助が加わり、第三号から三好達治が加わるとともに北川が復帰した。短詩や散文詩への新鮮な感覚によって第一次大戦後のモダニズム詩の先駆的な一環をなしたが、日本の植民地であった大連からの発行などが絡んで独特な性格を示した。それはまず「春」と題する安西冬衛の「てふてふが一匹驢轡海峡を渡つて行つた」(「亞」における原形では「驢轡」が「間宮」となっており、「軍艦北門ノ砲塔ニテ」と小註がつく)などに見られる凝縮された国際性である。もっとも、その簡潔性が一方で伝統的な俳句に通底していたことは、誌上に同人の句作があることから知られる。また、即物的な抒情性や瀟洒な絵画性に特徴があるが、それは西欧の文学にも影響されたもので、老犬の背中をベンを試うというジュール・ルナール

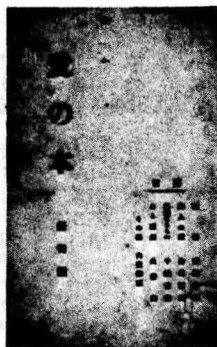
の言葉を詩誌のエピグラフにしたり、ポール・エリュアールの詩を三好達治、北川冬彦が共訳したりしている。詩論には安西冬衛の『稚拙感と詩の原始復帰に就いて』があるが、芸術は単純から複雑へ、そしてまた単純へと進展すべきだとされ、アンリ・ルソーの絵の原始復帰的な審美観念を稚拙感と呼んで、そこに詩の美意識を求めている。この考えは滝口武士の「あの乳房にはタンポポがはいつてるよ」(『六月』)といった想像にはすぐ結びつくが、北川冬彦の散文詩における現実の矛盾への接近とはすこしずれる。しかし、イメージの明確さを求める芸術的な立場は同人に共通で、終刊が満州事変の起こる四年前であることは、まだ亀裂が意識されていない植民地的な生活地盤を想像させる。詩の展覧会という尖端的な試みも、大連の三越で重ねている。(清岡卓行)

「愛国志林」は、評論雑誌。明治一三・三一・一四・六。編集発行人植木枝盛。愛国社、愛国志林社、愛国舎発行。大阪で創刊され同年八月まで一〇編を刊行。ついで同月「愛国新誌」と改題、愛国舎、愛国社発行。月四回のちには三回刊行し、一四年六月、三六号にいたり、新発足の「高知新聞」に吸収合併されて終わる。この雑誌は明治一年大阪で再興された愛国社系民権派の機関紙であり、植木枝盛は水田一二とともに編集に当たり、おおいに自由民権論を鼓吹した。民権派の機関紙としては「土陽新聞」の伝統をついでいる。掲載論文のうちおもなものには植木枝盛の『人民の国

家に対する精神を論ずる』(「愛国新誌」明一三・一一・一二ノ二八)『政府の性質を論ずる』(「愛国新誌」明一四・六・一七)などがある。同誌は当時の自由民権家にとってほとんど必読の書とされたものであり、その影響力はきわめて大きく、一地方雑誌として見るべきものではなかったとされている。(村山吉広)

「あいなめ」詩雑誌。昭和二三・八ノ四五・二。全三〇冊。編集人松本亮。あいなめ会発行。金子光晴、宮崎謙、松本亮、河野文一郎らのほかに、若い女性も数名参加し、二〇名ほどの同人がいた。安東次男、山本太郎、北村太郎、英木のり子、大岡信らも詩を寄せている。金子は「発刊の辞」で、「かつてなことを言いあっても怒らぬこと。やるからには上達することをこころがけること。いっさいの既成のたて値からは無縁に、各自の見識でものを評価すること」を理想としているが、秋山清「かなしい思いはしたくない」、松原新一「私詩の限界について」などは、その意味で注目される。詩は概して女性のほうがよい。金子は詩集『泥の本』(未刊)『愛情69』『よこれてみない一日』(「あいなめ叢書」)の一部や『交友録』、松本が聞き手になった『あいなめ談議』(のち『新雑事秘辛』として出版)と毎号掲載している。同人の詩集が「あいなめ叢書」として出版された。(首藤基澄)

「愛の本」誌。同人雑誌。大正六・九ノ八・五。編集人ははじめ千家元鷹、つづいて近藤栄一が中心となり、さらに斎藤清次郎に移る。愛の本社発行。「白樺」の衛星雑誌「生命の川」終刊につづいて出されたもの。創刊号には古屋芳雄の連載小説「犧牲」、倉田百三の論文「隣人の室」、千家の小品「異様なもの」、犬養健の『或る感想』など掲載。『六号雑誌』で千家が「愛の本は平凡な文壇の空気を変へるだらう」とその抱負を語っている。千家の『車の音』『我が児は歩む』『初めて子供を』『自分は見た』『雁』など、のち第一詩集『自分は見た』に収められる彼の代表的な詩はこの「愛の本」に掲載されたもの。倉田の戯曲「歌はぬ人」、近藤栄一の脚本「竹取物語」や詩、佐藤惣之助、早川孝之、陶山篤太郎らの



愛の本(創刊号)

詩や短編もここに掲げられた。表紙は第五号より岸田劉生が協力。この愛の本より近藤栄一の詩集『サマリヤの女』も刊行された。(紅野敏郎)

「青」は、俳句雑誌。昭和二八・一〇ノ。虚子門の波多野爽波が主宰者。はじめ京都市左京区春菜町、ついで神戸市東灘区岡本古川、さらに京都市右京区太秦組石町と主宰者の転動にともなうて発行所が変わり、現在は美木市若園町一三三三。創刊号に次いでその後三回におよび主宰者と同窓の三島由紀夫の寄稿があり、注目された。ホトトギス派の中にあつて清新な作風を示す。主要同人は宇佐

美魚目、大塚あきら、吉本伊智朗、柏村貞子、中杉隆也ら。
(幡谷東吾)

「青い馬」誌。文芸雑誌。昭和六・五・七・三。全五冊。編集発行人坂口安吾。岩波書店発行。フランス文学の紹介を目的とした「言葉」の後継誌。「言葉」の廃刊後、山田吉彦(きだ・みのる)の助力を得て、坂口安吾、葛巻義敏が創刊した。創作、翻訳を主にした前衛的な雑誌で、ツアラ、コクトーなどの訳が収められ、創作には坂口安吾の『風博士』(昭六・六)「黒谷村」(昭六・七)、評論には葛巻義敏の『この人を見よ』、坂口安吾の『FARCEに就いて』などの秀作がある。
(関井光男)

「青い花」誌。文学同人雑誌。昭和九・一二。全一冊。編集発行人今官一。青い花編集所発行。「海豹」を脱退した今官一と太宰治とが中心になって企画し、伊馬鶴平、檀一雄、津村信夫、中原中也、山岸外史、小山祐士、木山捷平らを糾合、一八名の同人で創刊。太宰治「ロマネスク」、津村信夫「信濃とところどころ」、中原中也「山羊の歌」より「雪山俊之」「ナポレオンとラスコリニコフ」など掲載。一号を出して休刊のまま、翌年、「日本浪漫派」に加入して消滅した。
(山内祥史)

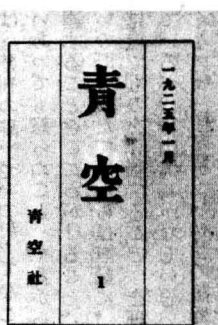
「青垣」誌。短歌雑誌。昭和二・一一。大正一四年五月に古泉千樫が門下とともに組織した青垣会の機関誌として、千樫没後三ヶ月を経て、その追悼号が創刊号として発刊された。編集発行人は大熊長次郎、没後は橋本徳寿にうつる。戦争中休刊があったが、昭和二年三月復

刊、今日にいたる。創刊当時の主要会員(当誌には同人の名称なし)は三ヶ島葎子、安田稔郎、水町京子、鈴木杏村、北見志保子ら、現在のそれに安田をはじめ吉川金一郎、原一雄、知久正明、松尾熊太、正木栄らがある。なお「青垣叢書」として、主要会員の歌集のほか、『定本古泉千樫全歌集』(橋本編、安田編)、『三ヶ島葎子全歌集』(橋本編)、『大熊長次郎全歌集』(橋本編)、『古泉千樫とその歌』(橋本著)などがあり、一〇〇編以上が刊行されている。
(山根 巴)

「青芝」誌。俳句雑誌。昭和二八・八。昭和四九年末現在通巻二五〇号。青芝俳句会発行。日野草城門下の八幡城太郎主宰により相模原市上鶴間谷口から創刊。城太郎は昭和初期勃興したいわゆる新興俳句の作者だが、戦後とみに穩健となった。主要同人に、中村菊一郎、長谷近太郎、山本つづみ、麻上ひで子、横山寅平ら。主宰者の交遊の広さから、田中冬二、那須辰造、高橋邦太郎、宮修二、八木義徳、野田宇太郎ら五十余名からなる青芝友の会の設けられているのも異色である。
(幡谷東吾)

「青空」誌。文芸雑誌。大正一四・一一。昭和二・六。全二八冊。編集発行者は外村茂(のちの外村繁、ついで淀野隆三、梶井基次郎。青空社発行。スタートのときの同人は稲森宗太郎、梶井基次郎、忽那吉之助(のちの野村吉之助)、小林馨、外村茂、中谷孝雄。創刊号巻頭に掲げられた梶井の短編「檸檬」によって、のちの同人誌は大きく評価される。中谷と同じ三重県出身で、早稲田に入って窪田

空穂に学んだ稲森を除けば、三高から東大にすすんだものの自由な集まりの場、それが「青空」であった。歌人稲森は一号で抜け、第四号より淀野隆三、浅沼喜実、ついで飯島正や三好達治や北川冬彦らも参加。今日では尾崎一雄らの「新潮」、中野重治、堀辰雄らの「驢馬」などとともに昭和文学の源流を形成する有力な同人誌として評価されている。同人誌特有の、他が他を傷つけあう嫉視反目的な姿はほとんどなく、小説、詩、評論、戯曲、映画、絵画の分野に、おのがじしうちこむという「和而不同」的雰囲気



青 空(創刊号)

があり、淀野隆三や浅沼喜実らのきも入りもあって比較的長くつづいた。「檸檬」につづき梶井は、第二号に『城のある町にて』、第五号に『泥濘』、第八号に『路上』、第九号に『花』、第八号に『路上』、第九号に『雪後』、『Kの昇天』表、さらに『過去』『雪後』『Kの昇天』『冬の日』など梶井の名作のいくつかがほとんどこの「青空」誌上に掲げられた。創刊号に発表した中谷の『初歩』はのちの彼の第一創作集『春の絵巻』巻頭の『春』と重なりあう題材で、青春期の懶い気分がよく描かれている。外村の『杪秋』(九号)は梶井も評価している。一年経ての同人の雑記には「白樺」の

「六号雑記」的な屈託のなさもうかがえ、同人たちの結束ぶりもわかる。飯島正の参加も、三高時代寄宿舎同室という縁によるものである。映画ずきの飯島ではあったがこの「青空」には小説や戯曲も寄稿。淀野の友人三好の参加した第一六号には、はやくも彼の代表詩「乳母車」などが掲げられている。同人印象記で中谷は「三好君の姿勢には、何処か、若い士官を思はせる様な、端厳さがある」と書いている。つづいて三好は第七号に『整のうへ』を発表、梶井と同じく初期の代表作の多くがこの「青空」に掲げられたのである。北川冬彦、阿部知二、古沢安二郎ら旧「朱門」の人々や「真昼」の浅見篤らが加わったのは第二二号の大正一五年一二月号からである。北川については「街路樹と壁と鉄の管と、女と囃と軍艦の詩人」と三好が評している。北川は第二四号に「軍艦を内蔵してある」という一行詩「馬」を発表、また第二五号には、三好の著名な「太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ/次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ」という「雪」も発表されている。第二七号には、「新潮」の合評会に抗して青空社と東京帝大文芸部合同の「青空合評会」(舟橋聖一、今日出海、丸山薫らも出席)の試みもある。この前後には湖山貢の筆名で浅沼喜実がプロレタリア文学関係の評論も書いている。第二八号で巻を閉じるが、初心を失わぬ、清潔にして、芸術的な同人誌の典型として記憶されるべき存在である。表紙は同人忽那吉之助、清水夢作らのほか吉田謙吉も協力

している。日本近代文学館より復刻（昭四五・六）された。（紅野敏郎）

「青嶺」^{あおね} 俳句雑誌。昭和九・四・一二。日野草城主宰の下、水谷碎壺が発行人となり大阪から発刊された新興俳句雑誌で、たちまち大阪に新興俳句を興隆させる勢力を示した。草城選の「青嶺俳句」を都会編と田園編の二本立てにした点は斬新な試みであった。都会編は、当時、高唱された都会俳句の生産を助長せんとする趣旨に基づくもので、サラリーマン階級を主軸として、近代的な風俗描写に先鞭をつけたものだった。「なめらかに服地垂れをりシクラメン」（草加江）。第二号では草城の著名な連作「ミヤコ・ホテル」一章について碎壺が鑑賞文を書いている。主要同人は水谷碎壺、井上草加江（鯉屋伊兵衛）、笠原静堂、片山桃史ら。従来、草城を選者とする新興俳句雑誌には「走馬燈」（東京）「ひよどり」（神戸）があったが、これに「青嶺」が合体して昭和一〇年一月、草城選の「旗艦」が創刊された。これによって「青嶺」は自然と廃刊された。

（楠本憲吉）

「赤い鳥」^{あかいとり} 児童文芸雑誌。大正七・七・昭和一一・一〇（昭四・三）五・一二は休刊。通巻一九六冊（六冊ずつを一巻とかぞえている）。鈴木三重吉主宰。赤い鳥社発行。「赤い鳥」発刊の主旨は、大正七年初頭に各方面にくばられた「童話と童謡を創作する最初の文学的運動」というプリントと、創刊号以来第三巻第四号ごろまでほとんど毎号の巻頭を飾った『赤い鳥』の「標榜語」に

くわしい。三重吉はその中で、「功利とセンセイシヨナルな刺戟と変な哀傷とに充ちた下品なものだらけである」子ども読物の現状を憂い、「子供純性を保全開発するために、現代第一流の芸術家の真摯なる努力を集め、兼て、若き子供のための創作家の出現を迎える、一大区劃的運動の先駆」たらんと期している。そしてまた「貧弱低劣なる子供の謡と音楽とを排除して」「芸術的な謡と音楽」を作ることと「少しも虚飾のない、真の意味で無邪気な純朴な」子どもの作文の養成をも唱えている。そしてこの運動に賛同した作家として、泉鏡花、小山内



赤い鳥（創刊号）

薫、徳田秋声、高浜虚子、野上豊一郎、野上弥生子、小宮豊隆、有島生馬、芥川龍之介、北原白秋、島崎藤村、森田太郎、森田草平、鈴木三重吉その他十数名、一年後には、右の作家のほかに、小川未明、谷崎潤一郎、久米正雄、久保田万太郎、松居松葉、江口渙、有島武郎、秋田雨雀、青木健作、西条八十、佐藤春夫、菊池寛、三木露風、山田耕柞、成田為三、近衛秀麿を加えている。三重吉が童話に傾倒し、「赤い鳥」創刊を決意した動機については、昭和二年一月に出た春陽堂版『明治大正文学全集 鈴木三重吉集』の「私の作編等について」の中

で、大正五年六月長女すずが生れた喜びのまに、いろいろな子ども読物を読みあさったが、あまりひどいものばかりなので「至愛なすずに話してやりでもするやうな、純情的な興味から」童話を書いた。これが「偶然の動機となつた」といつている。しかしこれは、三重吉が童話を書きはじめた一〇年以上もたってからの追憶で、実際は、三重吉の中には、処女作『千鳥』以来浪漫主義的な傾向が濃く、童話作家としての素質がなかったとはいえず、そのうえ、小説のほうでは行きづまり、また経済的にも苦しい事情があったので、誘われるまま童話を書くようになり、それが小宮豊隆のいうように「魚に対する水のやうなものを与へ」ついに「赤い鳥」創刊にまで到達したのである。『赤い鳥』の誌名については、小川未明は「赤い鳥」はどうかといひ、それら数種の誌名を書いたものの中から、らく夫人に選ばせたということだが、それだけが決定的なものとはいえず、三重吉の裡に、自然にきまつたものであろう。ともかく三重吉の熱意による文壇を挙げての応援が、巖谷小波を中心とする明治以来のお伽噺時代を蟬脱して、ここに近代児童文学の確立を見ることになった。『赤い鳥』の執筆家としては、前述の賛同作家のほかに、秋庭俊彦、伊藤貴鷹、井伏鱒二、内田百閒、宇野浩二、宇野千代、大木篤夫（惇夫）、片山広子、加藤武雄、加能作次郎、上司小剣、木下全太郎、楠山正雄、小島政二郎、下村千秋、相馬泰三、塚原健二郎、豊島与志雄、長田秀雄、中村星湖、南部

修太郎、福永渙、林芙美子、広津和郎、細田源吉、細田民樹、水木京太、室生犀星、宮原晃一郎、吉田絃二郎らがいる。童謡では白秋、八十のほか、三木露風、柳沢健など。また、坪田譲治、新美南吉、平塚武二、小野浩、木内高音、森三郎らは三重吉の指導により童話作家として現れ、白秋の門からは、与田準一、巽聖歌、佐藤義美、小林純一、柴野民三らが出ている。そのほか、少年時代の思い出を「赤い鳥」につなぐ人の数も多い。表紙、さしえは、清水良雄を中心に、鈴木淳、深沢省三、小笠原寛三、川上四郎、武井武雄、島田訥郎、寺内万次郎、前島とも子ら狭い範囲の人に限られていた。『赤い鳥』の成功は、「おとぎの世界」「金の船」「童話」等の同質雑誌を生み、三重吉は質の悪いまね雑誌だと憤慨しているが、「おとぎの世界」からは山村暮鳥「金の船」からは野口雨情、「童話」の千葉蒼三その他、それぞれ特徴のある作家作品を生み、ともに大正期児童文学のルネッサンスを形成している。最盛期には発行部数三万を越したといわれるが、関東大震災後の経済界の不況と、大衆雑誌の魅力に抗しきれず、第一次一二七冊昭和四年三月号で休刊、六年一月二七冊第二次六九冊を出した。三重吉には創作童話はほとんどないが、毎号を飾った「古事記物語」をはじめ、海外文学の再話が高く評価される。そのほか、芥川龍之介の『蜘蛛の糸』『杜子春』、有島武郎の『一房の葡萄』『宇野浩二の『露の下神様』、小川未明の『月夜と眼鏡』、坪田譲治の『小川の葦』、新美南吉

の『こん狐』、小山内薫、久保田万太郎の児童劇、北原白秋、西条八十の童謡と、児童文学の古典として今日に伝えられている作品も多い。「赤い鳥」の創刊された大正七年は、第一次世界大戦の終わった年であり、デモクラシー思想がさかんになり、新しい教育運動勃興の時代であった。成城小学校や自由学園が設立され、自由画、綴り方による児童の解放、形式主義の打破が叫ばれた。三重吉が意図した、小波お伽噺を、近代精神による文学運動に高めようとした仕事は、期せずして時流に投ずる結果になり、新時代の教育界からも支持された。それは近代児童文学の伝統を確立しただけではなく、三重吉による綴り方運動、白秋による児童自由詩運動となつて、画期的な金字塔を打建てた。ただこの運動が歴史的には輝かしい存在であるのに実質的に豊かといえぬのは、それが童心主義という小市民的文化主義の範囲を出なかつたので、その成長にも限度があり、大衆児童文学の圧力をくつがえすだけの力にも不足していた。「赤い鳥」の作品は、それぞれの著作集のほか『赤い鳥の本』『赤い鳥代表作集』『赤い鳥傑作集』などにまとめられている。なお昭和四三年に日本近代文学館から全巻の復刻が出た。

(藤田圭雄)

年、草城が「青玄」を主宰するようになってから、鎌太郎の雑誌と二本立てになり、草城没後は、鎌太郎選の雑誌一本やりとなった。抒情俳句の新しい方向を探ろうというのが、そのモットーである。主要同人に、岡沢康司、石黒白萩、稲月登介などがある。(清崎敏郎)

「赤と黒」は詩雑誌。大正一二・一・一三・六。全四冊、号外一冊。赤と黒社発行。萩原恭次郎、壺井繁治、岡本潤、川崎長太郎の四人によつて創刊され、のちに林政雄、小野十三郎が同人として加入した。ほかに交友仲間その他一〇名ほどの作品が掲載された。表紙とも黒一色な粗末な体裁で、創刊号二四ページ、第二、三号八ページ、第四号一六ページ、号外四ページである。創刊資金は有島武郎の寄金だったと繁治が回想記に書いている。

大正年代後半期は詩的変革の気運が全面的に盛上がり、新しいジェネレーションに属する詩人、作家の変革的、社会的性質の作品は総括的に「新興文学」と呼ばれた。そのような趨勢の中で「赤と黒」はもっとも激烈な変革意欲をしめし、第一、二、三号の表紙に「詩とは？ 詩人とは？ 我々は過去の一切の概念を放棄して、大胆に断言する！」「詩とは爆弾である！ 詩人とは牢獄の固き壁と扉に爆弾を投ずる黒き犯人である！」という「宣言」を掲げ、既存の文学、芸術を否定した。この否定の意思は第四号の『赤と黒運動第一宣言』において「否定せよ！ 否定せよ！ 否定せよ！ われわれの全力を否定に傾注せよ！」とい

う叫びとなり、暴力的破壊のショックンな印象を与えた。

しかし同人の作品は最初から変革的だったわけではなく、第一、二号掲載の恭次郎作品の題名は『煙と人間』『寒村を巡る煙』であり、繁治作品の標題は『風の中の乞食』『拳』である。作品形式は赤と黒同人が批判した民衆派の自由詩に共通している。だが作品主題に被圧迫者、下層生活者の悲哀や呪詛が含まれ、その点で「新興文学」として性格が明らかだった。

したがってわずか全五冊ではあるがその

赤と黒



赤と黒(創刊号)

を、時代人の苦悩として最も鋭く表現したもので、このグループを中野重治は福音詩派といい、萩原朔太郎は恭次郎作品をブルジョア系と規定した。

この運動の過程で赤と黒同人はわが国で最初の詩展を催し、全作品を警察に押収されたりした。また東京、前橋、伊勢崎で文芸講演会を開催するなど街頭進出を試みた。総じて「赤と黒」は当時の詩的変革の潮流の中で否定と破壊を最も積極的に遂行し、近代詩から現代詩への推移に見落とすことのできない役割を果たした。また恭次郎、繁治、潤、十三郎ら主要同人がそろうアナーキズムの思想的立場へ移ったことにおいて、芸術革命から革命芸術への途を典型的に踏むものであった。昭和三八年四月冬至書房より復刻版が刊行された。(伊藤信吉)

「赤と黒」は児童雑誌。昭和二一・四・二三・一〇。実業之日本社発行。大仏次郎、川端康成、岸田国士、豊島与志雄、野上弥生子による赤と黒協会を中心に、藤田圭雄が主筆として編集体制を整えた。この雑誌の意図や性格は、つぎのような「創刊のこぼれ」に明らかである。「……とん底に落ちた日本を美と力に満ちた国に作り上げて行かねばならぬ今の子供たちに、どちらへもかたよらぬ豊かな情操を養い、暖い心と正しい判断力を持つた人間にするやうに、あらゆる努力を傾倒したいと思つてゐる。大正の頃鈴木三重吉氏によつて主唱された赤い鳥の運動をわれわれはまだ昨日のことのやうに覚えてゐる。われわれの今度の仕事を通じて子供の世界にもう一度輝か

しい文芸復興の時が将来されたならその喜びは限りない。」

「赤とんぼ」は創刊のころは四八ページ、のちに六四ページという薄い雑誌だったが、異色の存在で、「赤い鳥」の伝統をうけつぎ、児童文学の復興と綴り方教育の再建をめざして輝かしい業績をつみあげていった。児童文学者のほかに主と



赤とんぼ(創刊号)

しておとなのために書いてきた文壇作家も荒廃した敗戦後の子どもたちのために意欲を示したが、誌面のつごうもあってその多くは短編であった。その中には、戦後の代表作と評価されるつぎのような作品がある。塚原健二郎『たらい』、木内高音『建設列車』、壺井栄『ヤッちゃん』、関英雄『お化けものがたり』、岡本良雄『ディオゲネスの家』など。短編連作としては青木茂『三太物語』があり、これはラジオの連続ドラマでひろく知られるようになった。この雑誌が生み出した唯一の長編は竹山道雄『ビルマの堅琴』で、これは戦後の代表作としてすでに古典に準ずる評価をかためている。この雑誌は、いわゆるノン・フィクションに力を注ぎ柳田国男、中谷宇吉郎、岡田章雄たちが業績を残した。詩、童謡ではサトウ・ハチローをはじめ野上彰、与

田準一、異聖歌、草野心平、百田宗治、藤田圭雄らが活躍した。(菅 忠道)

「アカネ」短歌雑誌。明治四一・二・四二・七。二巻六号まで通巻一八冊。編集兼発行者三井甲之助(甲之)。根岸短歌会出版部発行。正岡子規の衣鉢をつぐ根岸短歌会の機関誌「馬酔木」の終刊(明四一・一)をうけ、その後継誌として創刊。誌名は「馬酔木」の編集発行者伊藤左千夫の命名による。ただし、当初から「文芸雑誌」と銘うち、短歌以外に俳句、詩、小説、評論、翻訳等々広汎な領域におよび、文芸一般誌の体裁をとった。翻訳、紹介ではフランス文学の広瀬青波(哲士)、ドイツ文学の増田八風(基治郎)、俳句およびその評論では大須賀乙字、萩原井泉水ら、歌論、文芸批評では編集者甲之がそれぞれ筆をとり、当時としては新鮮な文芸誌として注目された。短歌では旧馬酔木同人らが出詠し、土屋蛇床子(文明)もまたここから出発している。しかし、甲之の独善的な編集態度にあきたりない左千夫ら旧同人との間にしだいに感情的疎隔を生じ、やがて後者は蔵真がおこした「阿羅と木」(明四一・一〇創刊「アララギ」)に拠り、根岸短歌会は分裂するにいった。

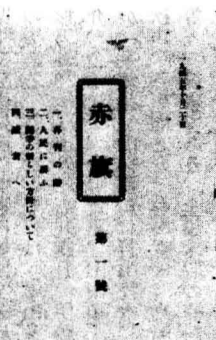


アカネ(創刊号)

「阿羅と木」発刊後も刊行を続け、甲之と左千夫、また左千夫門の斎藤茂吉との間にはげしい論争が交わされたが、明治四二年六月、両誌合同の議も起こった。しかし茂吉、石原純、古泉千樞、柿乃村人(島木赤彦)ら左千夫門下の反対で実現を見ず、四二年七月をもっていったん休刊となった。その後四四年五月にいったん復刊、さらに翌年五月「人生と表現」と改題し、大正一四年まで断続刊行を続けたが文芸誌としての意義は第一期にとどまる。創刊号に「広く文芸全般にわたる創作批評を掲載」(「消息」)とたたったように評論誌的色彩が濃く、とくに「ホトトギス」や漱石一派にたいする批判的態度が著しい。乙字の『俳句界の新傾向』以下の俳論は収穫であり、甲之の『詩歌製作の衝動と其表現法を論ず』などが茂吉の歌論にある種の影響をおよぼしている点も注目すべきであろう。(本林勝夫)

「茜」俳句雑誌。大正七・一、昭和九・二。主宰新井声風。東京市豊島区長崎南町より発行。最初、声風の個人雑誌として出発、第二巻第二号で休刊。大正一三年「あかね」と改題して復刊、第四巻第一号で休刊。昭和六年ふたたび発行、六号で休刊。九年二月より復刊したが随時不定期刊となった。消息を中心とし、明治以降の俳人俳書研究誌とした。旧同人富田木歩の紹介研究も同誌の特色であった。超流派、定型律を守り真実の句を主張した。(楠本憲吉)

き」と称す。第二回普通選挙を一日後、ひかえた二月一日、それまで合法の「無産者新聞」にたよっていた共産党の機関紙活動の独自化、公然化のため、非合法新聞として発刊された。月二回刊、定価五銭であり、旬刊を目標としていたが、あいつぐ弾圧のため不定期刊に追いつまねながらも再刊をくりかえし、昭和七年四月八日の第六九号より月六回刊、活版印刷にまで発展した。しかし、党組織自体は、創刊当時がつとも強大であり、七年四月はちょうど党組織が急速に壊滅してゆく時期にあたっていたため、党が目的としていた、機関紙によって活



赤旗(復刊第1号)

動を組織し発展させるというスタイルはとれず、八年二月、中央部が一名の中央委員を残すのみになると、しばしば休刊し、一〇年二月二〇日付け第一八七号で発行を停止しなければならなかった。戦前のものは、二七、二九年に三書房より復刻された(全四巻)。

敗戦によって、獄中幹部が釈放されるや、昭和二〇年一〇月二〇日「赤旗」(あかはた)の名で復刊され、声明「人民に訴ふ」を第一ページにかかげて、合法化した党再建活動の中心的役割をになつた。ついで「アカハタ」と記し、日刊

となる。二五年六月二六日、朝鮮戦争開始の翌日、マッカーサー指令により三〇日間の発行停止処分をうけるも、つぎつぎに題名を変えて後継紙を発行しつづけ、二七年五月一日、平和条約の発効直後に「アカハタ」としてふたたび復刊。のち、四一年二月より「赤旗」と改めて現在にいたっている。現在は日刊紙として数十万の発行部数を誇り、昭和三四年三月より発刊された日曜版の読者を加えると、資本主義国最大の部数をもつ共産党機関紙として発展した。

文化面は、戦前は設けられることなくおわり、昭和二十年代では徳永直ら旧プロレタリア作家の作品にとどまる傾向を脱せなかったが、四十年代には党外の飯沢匡、松本清張らの小説をしばしば掲載し、紙面の多様化に努力しているのにも注目される。

(飛鳥井雅道)

「赤門文学」は、文芸同人雑誌。前後五回にわたって刊行された。第一次は、昭和「六・一二」一九・二。全二冊。編集人赤門文学会、代表石川道雄。赤門書房発行。事実上の編集責任者は平田次三郎で編集後記の大半が彼の手になる。創刊号は菊判、一七二ページ、定価五〇銭。東大系の同人誌「豊葦原」「群島」「詩と小説」「石段」「新樹」「新思潮」「野」の七誌七十余名が合同成立した赤門文学会の機関誌。号数を追うごとに紙幅や発行部数の縮小、発行期日の遅延が目だった。第三巻第四、五号以降は三二ページ前後、定価三〇銭となり、編集経営の責任がすべて文学会に委ねられた。おもな執筆者に、平田のほか佐伯彰一、

高橋義孝、渡辺一夫、上林暁、高見裕之、山岸外史、中野好夫らがいた。「戦時文学座談会」「日本に於けるヨーロッパ文化の位置」などの特集も編まれた。第二次は、昭和二三・六、一一。全二冊。編集人近代文庫社内、赤門文学編集室。近代文庫社発行。菊池靖と原子公平が旧同人とは別に再刊した。評論や翻訳に新鮮な魅力があり、荒正人、白井健三郎、沢木欣一らが活躍した。第三次は、昭和二七・一一。全一冊。編集人緒方君太郎。赤門文学社発行。第四次は、昭和三〇・四・三三・一二。全一〇冊。編集



赤門文学 (創刊号)

人小松伸六。赤門文学会発行。復刊第一号に掲載の駒田信二『瓶の中の世界』はラジオ・ドラマ化され国際放送コンクール、イタリア賞を受賞。ほかに山田昭夫による本庄陸男遺稿の紹介、新保千代子の『犀星さきがき抄』の連載もある。第五次は、昭和三五・四・三八・二。通巻四冊。第四次の復刊で編集人発行所も継続。吉村謙三『白い夏』、木野工『紙の裏』などの芥川賞候補作や、神品芳夫の翻訳が掲載された。なお終刊号は、ひにくにも『吉村謙三追悼特集号』となり、戦中から戦後を経た長命の同人誌の終末となった。

(太田 登)

「アカンサス」演劇雑誌。昭和二三・七・二五・五。一、二。編集兼発行人岡田八千代。日本女流劇作家会発行。岡田八千代が中心となり大村嘉代子、辻山春子、田井洋子、佐々木恵美子ら日本女流劇作家会のメンバーが同人主幹で、既成ならびに新人の作品発表の場として創刊。戯曲には八千代『鏡台』、春子『少年とネックスレス』、洋子『玉子』、恵美子『あしたの空』、可児松栄『紫陽花』など、劇評、随筆を会員が交互執筆。八千代没後解散。

(福田宏子)

「秋」俳句雑誌。昭和三六・一〇。編集発行人石原八束。「秋」発行所と句誌「雲母」を共同した石原八束の主宰する月刊俳句雑誌。石原八束を中心に鈴木詮子、志摩芳次郎、猿山木魂、大槻紀奴夫、村山鶴峽、文挾夫佐恵ほか、現代俳句の中堅新鋭を同人とする。戦後俳句における短詩型文学のエコールとしての拠点という性格よりも、石原八束を同心円とする文学的気風によって構成されるとと見られる傾向が強い。主宰の石原は詩人三好達治に師事。昭和三四年三月、達治、八束らを中心に隅田川舟行があり、このとき参集した若い俳人たちによって文章会を結成。この会がのち「秋」の母体となったと見るべきか。三好達治資料として同誌「三好達治追悼号」(昭和三九・七・八合併号)「三好達治一周忌特輯号」(昭和四〇・五)「三好達治三周忌特輯号」(昭和四一・六、七合併号)は貴重。なお、昭和四五・七・八合併号には『百号記念特輯』を刊行。

(小川和佑)

「秋田魁新報」(秋田魁新報) 日刊新聞。明治二二・二・一五。前身は明治七・二・二創刊の「遼遼新聞」。紙名の変遷を経て、明治三二年現在名となる。爾来、秋田県の代表紙として君臨。初代編集長は中村敬宇門下で、のち二六新報主筆もした長井金風。明治大正を通じて地方紙としてはめづらしいほど、文芸欄が充実しているが(現在も夕刊の一面全ページを割いている)、これは明治三四年一〇月主筆になった安藤和風に負うところが大きい。「恋愛俳句集」(明治三七・一二春陽堂)など多数の著書を持つ俳人の彼は県下文芸愛好者のために紙面を開放したのである。寄稿者としては、県出身の小杉天外、後藤宙外、石井露月、伊藤木之介、金子洋文、今野賢三、山田順子のほか、泉鏡花、山村暮鳥、若山牧水、徳田秋声、芥川龍之介、有島武郎、島崎藤村等々、多彩であり、全集未収の資料も多い。「秋田魁新報」昭和四四・三所載森英一「秋田魁新報と近代文学」。

(森 英一)

「俳秋の声」俳句雑誌。明治二九・一一・三〇・一〇。はじめ今沢滝次郎編集、万善堂発行。第五号より真山広吉編集、裳華房発行。明治二八年角田竹冷を中心に尾崎紅葉、大野西竹、巖谷小波、戸川残花、鶴沢四丁らが「道の滅亡を前途に憂ひ、私に志す所は明治の俳諧を興さむ」と秋声会を結び、翌二九年一月その機関誌として創刊した。第一号に紅葉の「発刊之文」を掲げてその趣旨を明らかにし、会員の俳句のほかに論説俳話を掲げ、また付録に『七部集連句注

釈『蓮二吟集』を掲げ、古典の研究に力を注いだ。その後「新派の流転た急なる時に遇ひて更に第三の進境あるべし」と、第一〇号（明三〇・一〇・五）の巻末に掲げた『改刊之辞』に「一冊子の狭きを出て普く世間大踏歩し……苟も十七字の調は秋の声たらしめむと此号以後我俳壇を『太陽』（博文館）紙上に高く築きて、ますます清音を振ふべき便りとす」と宣言し、一〇号をもって発展的解消をとげた。（柳生四郎）

（柳生四郎）

「アクシオン」詩雑誌。大正一五・九（昭和二・四）か？昭和二・二まで六冊確認。発行兼編集者三好十郎、のち編集者は上野壮夫。東京市外世田ヶ谷代田一五九三好方、アクシオン社発行。菊判、平均四〇ページ。大正一五年夏、アーキスティックな傾向の草野心平編集の「銅鑼」を脱退した三好十郎が稲門の同窓、坂井徳三、上野壮夫らと創刊した。「左翼詩の提供」「プロット・カルト」「左翼共同戦線」向つての絶えざる突進」が謳われた。前記三名のほか、壺井繁治、菅原芳助、近藤栄、海保俊郎らが名を連ね、高橋新吉も詩を寄せている。上野らの小説や三好、壺井らによる「現代詩人研究」も連載され、三好は『日夏歌之介』を書いている。また無署名の「世田ヶ谷通信」は、三好のマルクス主義への近づきを感じさせる感想がある。プロレタリア詩誌の先駆的存在。この雑誌はやがて無産階級芸術戦線の統一を謳った「左翼芸術」へ発展的解消をとげた。（辻淳）

「あけび」短歌雑誌。大正一〇・一〇

。「アカネ」終刊後の明治四二年末、大正日新聞記者であった花田比露思が関西の根岸派歌人安江不空、外山家人、鈴木葎房らを訪ねたことから、翌年関西根岸短歌会を結成。これが母体となり大正三年一月「潮騒」を創刊。のち「あけび」と改題した。当初読売新聞記者として東京にいた花田を人山雄一、大沢弘、今井規清、大亦寒風らが編集面で協力し、以後伊藤藤源、岡本大無、富坂賢太郎、島田兵三らの編集を経て昭和一六年六月休刊。七月から「八絃」と改題。「武都紀」から依田秋圃、浅野梨郷が参加した。また「那爾波」とも改めたが二〇年廃刊。二六年一月にいたり復刊、以後四七年六月まで林光雄が東京で主幹編集に当たった。現在は大阪の渡辺清次郎。子規の写生に万葉の抒情精神をふくめ、真心の歌、命の歌を提唱した花田の歌風にしがたが勁い調べが特徴。ほかに清水比庵らが特異である。（原邦良）

「あけぼの」新聞。明治八・一・二（五・三〇）。編集印刷総監関篤輔、青江秀、のち青江秀。日新堂発行。木戸孝允が長三洲、山県懸蔵らに発行させていた「新聞雑誌」が日刊新聞紙に庄せられて著しく不振になったので明治七年一二月二八日第三五七号とし、八年早々に上記のごとく改題し号数を継承した。紙幅は半紙判二つ折り八ページ建て鉛活字を使用している。が、これを当時の「東京日日新聞」や「朝野新聞」に比べると、なお狭小の感があった。署名者中旧「新聞雑誌」時代の関篤輔は一ヵ月後の二月から署名していず、青江秀のみ署名してい

る。これはいっさいの権利が青江秀に移ったことを意味するのであろう。このような改革にもかかわらず、記事に教導的色彩を感じられ活潑な意見も少なかったゆえか、紙勢を伸ばせないで、八年六月一日から「東京曙新聞」と改題して再出発するのである。（西田長寿）

「あけぼの」短歌雑誌。明治三四・六（九・全四号）。女性文化誌「女学雑誌」姫百合（明三三・一一）創刊。姫百合社誌上に、丸岡桂（月の桂のや）、田口春塘主宰のあけぼの会の詠草が載っていたが、同社からその投書家を中心として発行された純然たる歌誌。編集兼発行人高橋金作。四六倍判の約四〇ページの薄い雑誌ながら、初期の新派和歌の浪漫的な匂いを漂わせている。「曙会」は旧来の狭い範囲をはなれて純美の和歌を研究せむとする者の団体なり」とあけぼの会規約にあり、その抱負が知られるが、あたかも「明星」の発展期のため、蔭にかくれて終わった。なお桂、春塘共著の歌集「朝嵐夕雨」（明三三・一一）姫百合社、桂編、合同歌集「曙集」（明三四・六）姫百合社）などが、その周辺にある。（新聞進二）

「阿漕」俳句雑誌。昭和八・五（一一・一）（中ごろ）。昭和七年、長谷川素逝は一年志願満期退官、京都帝大文学部大学院を退学、津にもどり、九年、津中学教員となる。その素逝が中心となつた三重県下ホトトギス系機関紙。二八ページ。顧問に鈴鹿野風呂、雑誌選者に皆吉爽雨を迎え素逝は添削評論で指導、編集は伴野四天王、素逝ら輪番という体制。命名は虚子。近詠に野村泊月、本田一杉ら。同人木津蕉蔭ら。（豊田都縁）

「朝」文芸雑誌。大正一四・二（一五・六）。編集発行人逸見広。朝発行所発行。早大独文科在籍の井葉野篤三、城谷敏夫、逸見広らと仏文科卒業の紺弓之進（近藤正夫）によって創められた同人誌。国文科に在籍した浅見淵が大正一四年一〇月号から加わった。逸見が中心にあつて、「青春時代」（大一一四・二）「芸術以前」（大一一四・三）「没落への道」（大一一四・四）「二十代の一断面」（大一一四・五）「邂逅」（大一一四・六）「瘤定とその姉」（大一一四・七）「二人の詩人」（大一一四・八）「委める者」（大一一四・一一）「望郷」（大一一四・一二）などを続々と精力的に発表。ことに「望郷」は後年、加筆、「死児を焼く二人」（昭三・四）と改題された逸見の代表作の一つ。井葉野の『豆狸』（大一一四・四）も川端康成の、同人雑誌中、「大いに推賞した」と思ふ作」とする評価をうけている（「文芸時代」大一一四・五所載「四月諸雑誌創作評」）。紺の『夏』（大一一四・八）、浅見の『山』（大一一四・一〇）なども評判作であった。のち、尾崎一雄らの「主潮」と合体して「文芸城」として新発足している。（保昌正夫）

「朝虹」俳句雑誌。明治四〇・一（四五・二）。全五八冊。明治三八年、千葉県印旛郡富里村の鈴木虎月が発刊し主宰した「若桜」は俳句雑誌というよりは純文学雑誌の性格を持っていた。同人には安藤姑洗子、本多冬城、泉天郎、富田零余子（のち長谷川零余子）らが参加し

た。発行所は同県印旛郡酒々井町の虎月方、文学会。のち第三巻第一号（明四〇・一）より「朝虹」と改題して俳句雑誌となった。文学会も朝虹会となり、清宮紫虹（清三郎）が編集した。鈴木虎月は四四年八月、二四歳の若さで没した。富田零余子（のち長谷川姓となり、大正一〇年一〇月、俳誌「枯野」を創刊した俳人。ホトギス作家原月舟は、明治四三年に「朝虹」の選者となったが、それは零余子の推薦であった。泉天郎はのち碧梧桐門下の作家として活躍、冬城も碧梧桐系の「高台」（大正四・一一創刊）の作家となり、姑洗子（のち「ぬかご」）の「（枯野）改題」を主宰した。地方俳誌としての「朝虹」の存在が目玉される。

（伊沢元美）

「朝の光」^{あさひのひかり} 短歌雑誌。大正九・三・一・二・九。大正六年竹柏会に入会し、九年からは窪田空穂に師事した宇都野研が創刊。同人に氏家信、杉田鶴子ら。関東大震災のため廃刊。一三年一月、空穂系の「国民文学」「地上」と合同「国歌」となった。一四年ふたたび「国民文学」を名のつたが、「地上」「朝の光」は分離して「白樺」を創刊、昭和四年一月さらに両者が分離、研は朝の光同人らと「勤草」を創刊。

（橋本喜典）

「朝の笛」^{あさのはふ} 児童雑誌。昭和三・一・一・三・三・二。この間三・一、三二年の七八月号および三二年一・二月号は合併号。編集人浜田広介、発行人高田俊郎。朝の笛社発行。昭和三〇年五月創立の日本児童文芸家協会編集で発行、おりからの児童雑誌の漫画雑誌化風潮にたいし児

童文学を守る目的から創刊された。創刊号に浜田広介、斎田喬、石森延男の作品をそろえ、連載に「わんぱく広場」（福田清人）「さえもん家の子たち」（二反長半）「ねずみの合唱」（豊田三郎）「川のある村」（打木村治）「若武者絵巻」（氏原大作）「海の魔術師」（中沢堅夫）「銀紙の星」（今官二）「虹をわたる子」（伊藤佐喜雄）など順次載せた。読者応募の詩を阪本越郎、作文を石森延男が選評した。編集委員会は二反長半、白木茂、中沢堅夫、福田清人で直接企画、会員の協力があったが、さらに拡大する漫画攻勢に加えて直接読者を対象とした販売の弱さもあり、二年にして終刊以後、協会機関誌として「児童文芸」が刊行された。

（福田清人）

「あさひこ」 短歌雑誌。昭和一二・七・一・九・八（全八二冊）、昭和二一・一・二・九・一（全八六冊）、昭和三〇・四。大坪草二郎（竹下市助）が森園天浜らと創刊。昭和二年復刊。大坪は大正一〇年三月に「アララギ」に加入、赤彦、麓の指導をうけ、「写生を基本として中道をまもる」をモットーに「あさひこ」を主宰した。大坪没後は竹下光子、西川定子、西田嵐翠らによつて続けられている。昭和三〇年四月から月刊を廃して、随時刊行する形式にかわり今日まで続いている。

（水塚功）

「朝日ジャーナル」^{朝日ジャーナル} 週刊誌。昭和三四・三・一五。朝日ジャーナル編集部編集、朝日新聞社発行。創刊当時の編集人と田斎、発行人春海鎮男。「あすの世界を知り、あすの日本を考えるため」

「あらゆる問題をまじめに前向きに取扱う」新しいタイプの週刊誌を意図して（編集手帖）創刊された。内容は評論、解説、報道、連載（小説その他）の四つに分かれ、国内外における政治、経済、思想、文化などの重要な問題や事件の総合的な検討が行われ、問題理解のための有効的な方法や資料の提示がなされている。文学上の問題に関しては解説、時評、紹介などで流動する文学状況下での本質的問題が抽出され、その今日的意味が解明されている。また長編小説の連載では新たな文学創造を目ざし、鋭く大



朝日ジャーナル（創刊号）

胆な主題追求と方法的実験が試みられている。たとえば年来のテーマであった転向（背教）の問題を島原の乱を背景に追尋した堀田善衛の『海鳴りの底から』（昭三五・九・一八）三六・九・二四）や、土俗的な新興宗教の消長を内側からとらえ、宗教とはなにかを根底的に問おうとした高橋和巳の『邪宗門』（昭四〇・一・三）四一・五・二九）、あるいは新時代の到来を前に苦悶しつづける畢山の複雑な内部世界を重層的に描き、従来の畢山像の訂正を行った杉浦明平の『小説渡辺畢山』などがそれにあたろう。なおこのほかおもなものをあげると

大仏次郎『バリ燃ゆ』（昭三六・一〇・一）三八・九・二九、井上光晴『他国の死』（昭三九・三・一）二二・二七）、開高健『渚から来るもの』（昭四一・一・二）一〇・三〇）、石野径一郎『守礼の国』（昭四二・一〇・一五）一二・三）、高橋治『派兵』（昭四六・一・八）四七・二・一）、安岡章太郎『私説聊斎志異』（昭四八・九・七）四九・二・八）。特殊なものとして加藤周一『羊の歌』正、続（昭四一・一・一六）四二・四・九・七・九）一二・一七）『日本文学史序説』（昭四八・一・五）一一・二三）など。

（島田昭男）

「朝日新聞」^{朝日新聞} 明治二一・一二・五。日本の代表的全国紙の一つ。世界の新聞ベスト・テンの上位にあり、発行部数は自由主義諸国中最大、朝刊六七五万、夕刊四三三万、号数三万六四〇〇（昭四九・一・一五）である。東京、大阪、名古屋、北九州の各都市に、それぞれ地名を冠した本社を、札幌市に北海道支社（昭三四・二創設）を置き、同一題号の「朝日新聞」朝、夕刊を印刷、発行している。国内各地に支局、通信局を置き、地方版一四〇版を作製、また二三支局はメモ・ファックス受信装置と印刷機により電送特報を行っている。一方海外主要都市には、支局、特派員を置き、取材に当たるとともに、外国有力紙、通信社との特約により、広汎な通信網を有している。資本金二億八〇〇〇万円の株式会社組織によって運営され、株式の所有は従業員に限られている。社員、嘱託総数九三六名（昭四九・一・

一である。「朝日新聞綱領」に謳うところは、不偏不党の立場による、言論の自由の貫徹、真実の報道と進歩的中正な評論が主眼であり、あわせて、つねに国民の側にあって諸悪とたたかい、品位と寛容と責任を忘れぬことがいわれている。注目すべきは、この不偏不党、報道を主眼とする社是が、創刊早々の明治一五年七月一日の紙面に『吾朝日新聞の目的』としていち早く宣言されていることであり、それ以来今にいたるまで、毫もかわることのないことである。そして大衆紙であるとともに、高級紙であるという、世界でも類の少ない独特の形態を作あげている。

朝日新聞は、大阪商人木村平八が出資し、長男木村勝が、洋品雑貨の共同経営者村山龍平を社主として創刊したものである。縦三センチ、横二三センチ、四ページ建ての、内容、形式ともに、文字どおりの「小新聞」(当時政論中心の硬派の「大新聞」にたいして、社会記事を主とした軟派の新聞をいう)であり、一、二号を無料配布する奉仕ぶりであった。二年して村山は、所有権を木村家から譲りうけ、無二の協力者上野理一とともに、新聞経営に専心することを決意し、さきの「宣言」どおり、報道本位の模範的な大衆商業紙を作りあげることを目標とした。その努力はむくいられ、やがて全国大衆報道紙のすぐれた先蹤となると同時に、明治一二年七月一〇日、星亨経営の「めざまし新聞」を買収して「東京朝日新聞」を創刊してのちは、社会、政治評論も掲載するようになり、積

極的な紙面企画、販売政策も効を奏し、しだいに「大新聞」をしのご勢力となった。この東京進出は、大阪新聞資本として最初のものであった。翌二二年の帝国憲法発布では、詔書と憲法全文を、電報で大阪に送信するというわが国でははじめての、鮮やかなてぎわを見せた。その後も、大量の議事録を電報で送ったが、第一議会にそなえて輸入した、新鋭のマリノニ輪転機で印刷した、議事録の付録



は、のちに二葉亭四迷、夏目漱石が入社し、河上肇が寄稿するようになって動かぬものとなった。
大正二年、おりの憲政擁護運動では、桂、山本両内閣の成立に強硬に反対し、おおいに世論を喚起したが、寺内内閣の出現は、この氣勢に油を注ぎ、七年の西原借款、シベリア出兵、米騒動によって、大阪朝日は編集局長島居素川を陣頭に、連日「閣族官僚内閣」を糾弾した。かねて朝日弾圧をねらっていた当局は、八月二五日内閣弾劾の関西記者大会を報じた、「大阪朝日」夕刊に「白虹日」を貫けり」の一句を見つけ、ただちに発売を禁止し、不当に朝日新聞を起訴した。これが日本新聞史上、有名な、ナンセンスな白虹事件である。

朝日新聞(創刊号)

しかし余震は深刻で、村山は社長を上げ、野に譲り、「本社の本領宣明」なる改題の長文を天因に書かせ、かろうじて発行禁止を免れたが、それをしおに、島居素川はじめ長谷川如是閑、大山郁夫、丸山幹治、花田大五郎が退社し、社友の河上肇、佐々木惣一も同調した。このため朝日の論調は、いちじ生彩を欠いたが、吉野作造、柳田国男を迎えて、進歩的伝統をとりもどし、後年よくその伝統を活か

した、緒方竹虎、関口泰、笠信太郎によって重きを加え、世界的にも、日本新聞論調を代表するものとして認められるにいたった。

しかしここにはいたるまでには、さまざまの苦難、曲折があった。普選運動の精力的な推進、強硬な軍拡反対をはじめ、あらゆる政治、社会問題にたいする、徹底した自由主義的立場は、狂信的軍人の憎しみを買い、かの二・二六事件には、叛乱軍に襲撃されるなどのこともあったが、微動だもするものではなかった。満州事変以来第二次大戦が終わるまでは、息づまる言論統制強化時代であり、執筆禁止、拘禁の憂き目を見る社員もあり、用紙も統制された。戦後は、占領軍の検閲下に置かれ、追放、レッド・パージに見舞われた。平和条約締結に当たっては、中立、全面講和を、どこまでも主張し、安保闘争では現実主義を通し、終始ベトナム和平を推進して、今日にいたっている。

経営面では、「白虹事件」後の社内体制の整備を必要と感じた村山は、大正一〇年、台湾総督府総務長官下村宏の入社を求め、専務として経営組織の近代化をゆだね、それに成功し、昭和一〇年には門司(のち小倉)、名古屋に支社を置き印刷をはじめにいたった。経営政策上、新聞社の付帯的な各種の文化事業は、不可欠のものであるが、この点村山は創刊以来、とくに民間航空事業、アマチュア・スポーツの発展に意を用い、努力した。また出版事業にも関心が深く、創刊早くも各種の出版物を刊行し、明治

年間美術雑誌「國華」、「二葉亭全集」以下八点、大正に入ると、週刊誌、年鑑、多種類の単行本のほかに、『近松全集』『契沖全集』を出版し、昭和初期には『元暦校本万葉集』『六国史』のちに『日本科学古典全書』など、貴重な大出版を成しとげている。

朝日の文芸面の最初は、創刊以来、連載された小説にはじまる。木版挿絵入り、ルビつきの小説は、おおむね社員中の文才あるものが書き、当時の社会事件を脚色した『艦隊回廊』『白波』といった戯作者ばりの義理人情ものが多かった。なにさましろうとの余技、通俗因習に墮し、魅力を失っていった。しかし明治二〇年前後からは、宇田川文海、半井桃水、鑒庭篁村、宮崎三昧、右田寅彦、幸堂得知、嵯峨のやおむろ、渡辺霞亭、須藤南翠ら、通俗作家とはいえずくろうとが、ぞくぞくと入社して作品を書くようになってからは、やや面目を一新するようになった。そういう中で、『朝日新聞』が姉妹紙として、二三年一月二五日本末鉄腸の「大同新聞」を合併して創刊し、二八年まで続いた新聞「国会」が果たした文芸上の役割は注目値する。同紙が末広主筆のもとに滝本誠一がおり、寄稿者として穂積陳重、八束、中村正直、小中村清矩、末松謙澄、加藤弘之、和田垣謙三、杉浦重剛、星亨、大内青檉、森槐南の社友を擁していたことよりも、幸田露伴、石橋忍月、志賀重昂、三宅雪嶺、斎藤緑雨が社員としており、健筆を揮ったことが目をひく。露伴の『七変化』『五重塔』『さ、舟』『うすらひ』以下小

説二四編、戯曲一編、隨筆一三編が発表され、かれの作品の過半を占めている。

石橋忍月のすぐれた文芸評論、かれと入れ替わりに入社した斎藤緑雨（正直正太夫）の辛辣をきわめた評論、その代表作といわれる『油地獄』は、注目された。

森田思軒は『隔簾影』『無名氏』などの翻訳小説を、小杉天外は処女作『改良若旦那』『当世志士伝』などを、松原廿三階堂は『伯爵夫人の避鬼魂』などの短編を、それぞれ発表している。第一議会にそなえた新聞「国会」ではあったが、果たした役割は、一流の文芸新聞としての榮譽であった。

しかしなんといっても朝日文芸面の黄金時代を築き、日本文学史上に不朽の寄与をすることになったのは、二葉亭四迷が明治三七年三月四日、夏目漱石が四〇年四月一日入社し、つぎつぎに代表的傑作を発表したことであつた。二葉亭は『其面影』『平凡』を連載したあと、四一年六月一八日特派されて露都に出発するが、病を得て四二年五月一〇日シンガポール沖で客死する。漱石は入社翌々月から『虞美人草』を連載し、未完の『明暗』にいたるまで、『鶉籠』以後の全作品を発表しているが、そのかたわら、

「朝日文芸欄」を、四二年一月二五日から四四年一〇月二二日まで主宰し、新聞「国会」の露伴が「読売新聞」に拠る尾崎紅葉に対抗したのに似て、周辺の多くの作家、評論家、詩人、画家などを動員し、当時文壇の主流の親のあった自然主義文学に、おのずと対抗することになった（同欄の全容は日本近代文学館より

昭四八・九復刊）。そればかりではなく、四迷、漱石の作品と「朝日文芸欄」は、当時の新聞にとっては画期的に高級なものであり、新聞文芸のレベルを高める大きな刺激となった。ここで、いやがる二葉亭について小説を書かせ、一身を引受けて漱石を入社させた池辺三山の存在を忘れるべきではない。また漱石入社で鳥居素川を説きつけた大阪朝日の林寛記者も記録されるべきであらう。直接二葉亭に小説執筆を承諾させた東京朝日の某記者が、森田草平の『煤煙』問題で三山を糾弾して勇退を強い、「朝日文芸欄」廃止を余儀なくさせたことも記録されてよ

からう。なお前記のほか、大正昭和に掲載されたおもな作品を列挙すると、島崎藤村『新生』、谷崎潤一郎『痴人の愛』、菊池寛『第二の接吻』、山本有三『路傍の石』、岸田国士『由利旗江』、川端康成『浅草紅団』、吉川英治『宮本武蔵』、坪田譲治『風の中の子供』、舟橋聖一『花の素顔』、獅子文六『自由学校』、林芙美子『めし』、石坂洋次郎『丘は花ざかり』、伊藤整『花ひらく』、井上靖『氷壁』、石川達三『人間の壁』、松本清張『大岡政談』など。

また、朝日社員として有名になった文筆の人としては、石川啄木、土岐善麿、杉村楚人冠、長谷川如是閑、内藤湖南、岡本一平らがあり、そのほか朝日新聞に関係を持つことによって、世に出た文芸作品、作家は非常に多い。

通観して、「朝日新聞」が創刊されてから、現代にいたるまでの、最大の特長というか強みは、村山龍平によって、ま

ことにすぐれた、有為な人材が多く集められ、「綱領」精神とともに今に続いていることを措いてないといえる。

（杉村武）

「朝日評論」誌誌 総合雑誌。昭和二一・三二・五・二二。全五八冊。編集発行人小倉敬二、のち福井文雄、杉村武ら。朝日新聞東京本社発行。日刊紙、週刊誌。年鑑をつなぐ時局評論誌として誕生。伊藤整『文学の宿命』、竹内好『人民への分派行動』、長谷川如是閑『ある心の自叙伝』などのほか、創作では大仏次郎『地霊』、若杉慧『エデンの海』、船山馨『半獣神』、木下順二『三年寝太郎』、太宰治の遺稿『グッドバイ』などが載った。書評欄の充実が目立ち、日本史再批判と国語改革への注目もつづいた。

（高橋新太郎）

「アザミ」 短歌雑誌。昭和二三・一・三三・七。編集発行人山口茂吉（六号まで小谷心太郎）。アザミ発行所発行。斎藤茂吉門下の山口茂吉主宰で創刊。堅実な写生短歌を標榜し、茂吉歌風の継承発展をめざしたが、山口の死去により、その追悼号（一一巻七号）を最後に廃刊となった。主要同人に小谷、大成龍雄、大内豊子、磯幾造らがあり、昭和三三年一〇月、小谷らの手で雑誌「童牛」が創刊された。磯は三六年六月「表現」を創刊。

（本林勝夫）

「あざみ」 俳句雑誌。昭和二一・三。発行人河野多希女、編集人河野南畦。南畦を主宰に頼祭系の桜木俊晃、巽巨詠子、鈴木凡哉、立川浪江女らが集まって創刊したもの。中河与一、小池吉昌、吉

村英夫らの賛助下に新浪漫主義を標榜。
『あざみ俳句選集』ほか同人の個人句集
の刊行など活潑な活動を示している。主
要同人に泉春花、大木異郷、平柳青且
子、田中妙子、鈴木蚊都夫、乾鉄片予ら
ほか。

(鎌倉東喜)

「葦」も 同人雑誌。昭和二・三・一
二。全三冊。発行者吉行淳之介。七曜会
発行。吉行淳之介、熊谷達雄、久保明
郎、柏木正幹、島基三、黒野郷八郎、佐
賀章生、木戸徹ら東京帝大七曜会のメン
バーによって創刊。戦後の民主化運動と
は無関係におのれの資質をおもむろに掘
下げる意志が明確に認められる。吉行や
熊谷の詩が光っている。第二号より平山
良吉、第三号より椿実が参加。吉行の最
初の同人誌として『私の文学放浪』（昭
四〇・五 講談社）のなかでも意味ふか
く回想されている。

(紅野敏郎)

「亜細亜」も 評論雑誌。明治二四・
六・二六・一〇、一一、二七・七、一
〇。全八五冊。政教社発行。「日本人」
が明治二四年四月、七二号で発禁となっ
たので、その身替わりとして出された。
二五年二月までは週刊で七〇冊、二六
年二月から一〇月まで月一、二回で一二
冊。二六年一〇月、「日本人」が再刊さ
れたが、その後も三冊出た。三宅雪嶺、
志賀重昂らの日本主義の団体政教社の雑
誌だが、「日本人」にくらべ長沢別天、
内藤湖南、田岡嶺雲ら若い世代の活躍が
目だつ。別天は『蓬萊曲』批評（一
号）『社会主義論』（一八、二〇号）のほ
か、第二六号から第二巻第一号（明二
六・二）まで、毎号のようにアメリカ通

信を寄せ、アメリカにおける日本人問題
などを論じている。樹々生（田岡嶺雲）
は『平民的短歌の発達第二を読む』（六
一号）で登場、以下毎号のように書いて
いる。ほかに森本駿訳、社会主義小説
『大破壊』（三八・六五号）の連載、不
痴不慧子（湖南）の別天あての手紙（二
二、三八号）がおよし。い。（山田博光）
「亜細亜詩人」も 詩雑誌。昭和二
八・九・二九・六。編集者大江満雄。西
東書林（札幌）、のち制作社発行。創刊
号には伊藤信吉の『ヒューマニズム詩人
の系譜』、片山敏彦の『ラビンドラナ
ー・タゴール』はじめ北川冬彦、村野四
郎、山本和夫、笹沢美明らの評論、蔵原
伸二郎、藤原定、大江満雄、上林猷夫ら
の詩が掲載された。第二号は翌二九年六
月発行。伊藤が『松永延造のこと』を寄
せている。山室静、蒲池歎一らも協力。
二号以降は未確認。

(紅野敏郎)

「馬酔木」も 短歌雑誌。明治三六・
六・四一・一。四巻三号まで通巻三二
冊。正岡子規没後の翌年、伊藤左千夫が
中心となって、子規の着手した短歌革新
運動を継承、発展させ、根岸派の貞価を
問うべく、長塚節、香取秀真、岡篭、蔵
真、森田義郎らを編集同人として結束を
固め創刊。左千夫（伊藤幸次郎）を編集
者とし、森田義郎を発行者とした。

発行所は、左千夫方に置き、根岸短歌
会の名称を用いた。誌名は投票により編
集会議で決定。創刊号の内容は、子規の
歌を巻頭に、以下左千夫『万葉論』、節
『万葉集巻の十四』、桜芽（節）『馬酔木
に題する歌并短歌』、安江秋水『霜水小

筆』などの歌論や作品を載せ三二ペー
ジ。第二号から左千夫、貞の選歌欄を設
け、号を追ってページ数も四〇ページを
こえる。明治三六年から三八年一月にか
け第一五号を出し、二月の一六冊目から
第二巻第一号と改めて七冊。三九年から
第三巻として七冊、四〇年の第四巻は二
冊、翌四一年一月を第三号として終刊し
た。

内容面は、短歌作品を中心に、歌論、
小説、随想、写生文、長歌、新体詩、翻
訳詩等を載せ、その編集も多彩である。
とくに左千夫、節、貞、義郎らの活躍が
目だつた。左千夫は『万葉集短歌通解』



馬酔木創刊号

など万葉研究を中心とする諸論、および
『今の所謂新派の歌を排す』『与謝野晶
子の歌を評す』など、現代短歌論にも力
を入れ、さらに『八幡森』『秋霧』など
の写生文、小説をも発表。一方、節は

『東歌余談』『万葉口舌巻の十六の研究』
など東歌の特色を明らかにし、詞書の重
要性を強調、『才丸行き』『須磨明石』な
どの写生文、また短歌『まつがさ集』

（一五）『羈旅雜詠』などの大作を発
表した。この両者による『馬酔木』推進
の役割は注目される。そのほか、前記の
歌人以外に結城素明、蔵檀堂、柿乃村人
（島本赤彦）、民部里静、石原純、赤木

格堂、胡桃沢勘内、柘植潮音、望月光
男、斎藤茂吉、岡千里、蔵桐軒、依田秋
圃、古泉千樫、三井甲之、篠原志都兄ら
が活躍し、財政面は蔵真が大部分を援助
した。この中で『アララギ』の中
核となった石原純は第二号から毎号歌を
載せ、島本赤彦は第五号から、古泉千樫
は第一三号から、斎藤茂吉は第三巻第二
号から、それぞれ歌を発表した。このよ
うに『馬酔木』は、子規とのちの『アラ
ラギ』とを中継する役割を果たし、赤
彦、茂吉ら大正期歌人の育成につとめ
た。当時全盛期を誇っていた新詩社の浪
漫主義歌風にくらべ、じみで万葉調を指
標する擬古の歌風は広く一般には理解さ
れずに終刊となった。終刊後たちちに三
井甲之編集で『アカネ』が根岸短歌会を
発行所として創刊されたが、甲之、左千
夫間に不和が生じ、左千夫などは蔵真を
発行人として『阿羅木』（アララギ）
を創刊するにいたつたのである。昭和四
七年臨川書店から『馬酔木』全巻の復刻
版を出版。岩城、藤沢編『馬酔木総目
次』（日本大学文学部三島『研究年報』
15）がある。

(藤岡武雄)

「馬酔木」も 俳句雑誌。昭和三・七
。主宰水原秋桜子。馬酔木発行所発
行。大正一一年四月、佐々木綾華の手で
創刊された『破魔弓』に水原秋桜子が同
人として参加したのは第二号からで、さ
らにその選者となつたのは一三年一月の
ことであつた。ところが会員は三〇〇名
たらずでいっこうに増えぬところから、
その原因は誌名の古さにあるとして昭和
三年七月、『馬酔木』と改題された。新

誌名は「馬酔木咲く金堂の扉にわが触れぬ」からとったもの。当時はまだ「ホトトギス」の子雑誌の域を出ず、作者も共通していたが、風景俳句が圧倒的に多く、ホトトギス風の瑣末な写生俳句、いわゆる草の芽俳句がまったく見られないのが「ホトトギス」との違いであった。

当時の秋桜子は俳句に作者の主観をこめることを志し、短歌的調べを尊重し、風景に印象画風の趣味を導入することに腐心していた（おもしろいことに後年の句敵、高野素十が「馬酔木」雑誌選を昭和三年一〇月から四年一月まで担当している）。しかし、秋桜子の作句精神が「馬酔木」全体に滲透していくためには、やはり独立以後まで待たねばならなかった。「ホトトギス」の瑣末化された客観写生俳句にあきたらず、その代表作家として虚子の推す素十俳句を強く非難していた秋桜子は六年一〇月、「馬酔木」に『自然の真と文芸上の真』を発表し、完全に「ホトトギス」から独立することとなった。これはまさに画期的なできごとであった。独立にさいして「馬酔木」に参加を要請した作家は軽部烏頭子、百合山羽公、村山古郷、佐野まもる、塚原夜潮らで、滝春一、篠田悌二郎、高屋窓秋、石橋竹秋子、加藤楸邨、石田波郷らの新進鋭鋭の作家もこれにつづいていた。この一文は俳壇にかつてない波紋を投げかけ、秋桜子が二〇〇に減ると考えていた部数が逆に七年はじめには一〇〇〇部を超えてしまった。このように急激に上昇する雑誌情勢に呼応して発行所も七年二月、四谷西応寺から神田小川町の

内神田ビルに移した。その前日、石田波郷が松山より上京、秋桜子の庇護下にあつて「馬酔木」編集にしたがうようになった。そして七年から八年にかけて「馬酔木」はさまざまな新機軸を打出した。なかでも馬酔木賞の設定、同人自選欄の新設は画期的な試みであった。第二回馬酔木賞は、篠田春蟬、高屋窓秋、石橋竹秋子、軽部烏頭子、中村三山であった。自選欄に推された作家は、烏頭子、春一、悌二郎、夜潮、まもる、窓秋、辰之助、古郷、波郷、瓜人、綾華の一二名であった。当時の「馬酔木」は連作俳句が



馬酔木

さかんで一種のブームの観があった。そして第一期同人につづいて、小山寒子、加藤楸邨、木津柳芽、中尾白雨、加藤かけい、山口草堂、米沢吾亦紅らの擁護が目だった。一〇年五月号が山口誓子が加盟し、連作俳句欄「深青集」の選者となった。この加盟と同時に窓秋が「馬酔木」を去っていった。このころ、新興俳句運動が俳壇に燎原の火のごとくひろがり、無季俳句がさかんに実践されたが「馬酔木」はこの運動とは別の道を歩むようになった。そして辰之助が去った。連作俳句にも反省期が現れた。連作俳句は無季俳句の温床となり、一句の

独立性が弱くなるという理由で、まず波郷、ついで提唱者である秋桜子もこれを否定するという結果になった。一七年には当時人間探求派と目されていた波郷、楸邨があいついで去り、波郷は十余年たずさわった編集を辞した。時局の逼迫、用紙統制による内容低下、そして二〇年空襲で秋桜子は病院、自宅を焼失、八王子へ疎開の止むなきにいたった。それでも雑誌は一月号まで順調に発行されたが、この年は以後三冊、そして二〇年二月に復刊号が出された。まず春一が去り、ついで二年一〇月誓子とその直系が去ったが、二三年四月、波郷が友二、桂郎とともに復帰した。二六年四月、「馬酔木」は三〇周年記念号を発行、その豪華な編集ぶりは俳壇の耳目を聳たしめた。波郷の療養俳句、堀口星眼、大島民郎らの高原俳句が新しい傾向として注目された。秋桜子は「軽衣旅情」の大作をはじめ国内をくまなく歩き、以後毎年

のように長期旅行を積極的に試みた。二九年一月、杉並区西荻窪に発行所を移し、編集事務も藤田湘子が担当するようになった。山田文男、能村登四郎、林翔、殿村菟絲子、藤田湘子、馬場移公子、堀口星眼、大島民郎、千代田葛彦、有働享、古賀まり子らの新人を輩出、多くの傍系誌を傘下に収め、発行部数も俳壇最高、「ホトトギス」に代わる俳壇最有力誌として現在にいたっているのである。草創以来の古参同人も衰えを見せず、第二次興隆期の同人もそれぞれ句境を深め、なによりも傘寿を超えた主宰の水原秋桜子が第一線の現役活動が続けて

いるのは大きい。そして「馬酔木」は四九年二月号をもって六〇〇号の誌齢を数え、その記念特集号を刊行することになった。

「余生なほ為すことあらむ冬苺 秋桜子」
(楠本憲吉)

「董分船」誌 文芸雑誌。明治二四・七・二六・七。全二五冊。編集人山田芝之園。大阪憲心社発行。「なにはがた」

「大阪文芸」等による、大阪での文学運動の隆盛に乗じて、紅葉に私淑する芝之園が大阪の友人の協力を得て、尾崎紅葉補助と銘うって創刊。それだけに、小説

中心の内容体裁は硯友社好みで、文学上の成果はあまりなかったが、芝之園の性格から、文壇的にははなやかであった。

当時「しがらみ草紙」に拠って審美学に立脚する論陣を張っている隅外に、創刊号以来たびたび論争を挑んだ芝之園にたいし、隅外もその学識のほどを軽侮しながら、長文を含めてたびたび反論を

「しがらみ草紙」に掲げ、論争展開となるなど、大阪という地域にとどまらずに中央文壇とおおいかかわったのである。また、徳田秋声が御月楼主人の名で小説を寄せたのは、とくに雑誌の性質と文学価値を認めてではないと思えるものの、四高中退後、大阪を放浪していた彼の動向とのちのちの志向の一部とを探る貴重な資料である。

(明石利代)

「明日香」々々。短歌雑誌。昭和一一・五。今井邦子が、国民新聞社内の女流の柳の葉歌話会を母胎として、創立したもの。邦子がアララギ出身で、島木赤彦門であったため、『万葉集』を宗とし、

鍛練道による写実的歌風で進み、女流のみの異色の存在の歌誌となった。昭和一九年二月で休刊、二一年二月に信州下諏訪で復刊したが、二三年七月邦子の急逝により、翌八月再度休刊し、一月『今井邦子追悼号』を出し、終刊した。二四年邦子の姪の岩波香代子を中心に、『明日香路』と改題、再出発し、三四年七月ふたたび『明日香』の旧名に復した。主要同人に、大井重代、大沢春子、横内菊枝らがあり、生方たつゝも戦前この派に属した。塩田良平ら社外の顧問制もあり、古典の研究、評論なども多く載せている。邦子『明日香路』(昭一四・一一古今書院)を第一編に、合同歌集『聖桃』(昭一七・一一)などを含む『明日香叢書』『明日香路叢書』がある。

(新聞進一)

「吾妻新誌」(ハルマ) 漢文戯作雑誌。明治一六・四一・一九・一一。九春社発行。「東京新誌」「春野草誌」につづいて服部撫松が主宰した雑誌。持ち主丸谷新八、編集人酒井忠誠、印刷人龜山徳三郎と奥付けにある。服部撫松、三木愛花、南園竹翠などが執筆。内容は、諷刺、風俗、雑誌、小説、漢詩などをおさめ、文体は、ほとんどが漢文だが、ときには漢文書下ろし体もあり、また、小説『花廬露恋廬路』などは、人情本調の和文で執筆されている。なかには、『東京新誌』と同じように、各政党のありかたを批判する『裏店政党』(八号)、偽善紳士の横行を罵倒する『礼服泥坊』(九号)のような諷刺的文章もあるが、それらよりも、『春木座劇評』(六号)、『新富演劇略

評』(二二号)、花柳界風俗をえがく『花柳盛衰記』(七号以後)、遊女列伝の『近世奇娼伝』(二〇号以後)などの軟らかい方面の文章が多いことが目につき、同じ服部撫松の雑誌とはいえないながら、前二誌よりもパンチの弱まったことは否定できない。

(興津要)

「アテネウム」 文芸雑誌。昭和三一・六・四四・一〇。一六号で中断。アテネウム発行所発行。『沿革および目的』に「一般創作においては長与善郎、短歌においては木下利玄を宗とする」とあるように両者に師事した岩淵兵七郎(明三三、宮城県出身)の個人的編集によるもの。圧巻は岩淵による第一号より欠かさず連載されている評伝『長与善郎一人と作品』。ほかに岩淵をはじめとする知己の創作、脚本、詩、短歌、随想などが載る。

(田中栄一)

「アトリエ」 Atelier 美術雑誌。大正一三・二。現在(昭四九・七・二五)まで通巻五七〇冊。編集発行人北原義雄。はじめアトリエ社、のちアトリエ出版社発行。北原義雄は、詩人の白秋、出版社アルスの鉄雄の弟。大正四年兄たちの関係していた阿蘭陀書房で社員として働いていたが、二三歳のとき兜町の株屋の小僧となり三年修業後、貿易商として身を立てたいと思っていたやさきの大正八年、義兄山本鼎のすすめで美術印刷会社清和堂の経営にのりだす。一二年(二八歳)の関東大震災で災害をうけたのを機会に、制約の多い印刷の仕事を断念、自由な企画でよい仕事をしたと美術雑誌出版を思い立つ。震災直後の苦難時代

に準備半年、山本鼎の尽力と清和堂の色刷印刷主任をしていた藤本韶三の協力を得て翌年二月一日「アトリエ」創刊号を出す(エとすべきところがエとなったのは表紙のデザインをした山本の誤りからだが以来戦後までこれでおした)。菊判、六四ページ、定価五〇銭で五〇〇部を刷った。用紙はザラ紙ながら、口絵に梅原龍三郎の『リンゴの静物』とエジプトのミイラ、執筆者は森田恒友『立派な素描』、中川一政『写実と象徴』、山本鼎『わが美術界の騎将』、木村荘八『古今の芸術観』のほか藤井浩祐『児童と塑造』、小杉放庵『王座話の話柄』な



アトリエ

ど。また石井鶴三の『彫刻の話』(凸凹の妖怪)も第二号から載りはじめる。当時洋画界は、文展、二科それに創立もない春陽会の鼎立時代で、創刊号につづく第二号を『春陽会号』(二二〇ページ)としたこともあって、「アトリエ」が春陽会の機関誌とみる世間の誤解を払拭するの苦労した。その後『中央美術』や「みづゑ」などに伍して、日本画、洋画、彫刻、工芸、教育美術を網羅した総合美術雑誌「アトリエ」の名は美術界に親しまれたが、戦時中いちじ「生活美術」と改称、それさえまたしばらく休刊

の余儀ないことになる。戦後昭和二一年八月一日に復刊号。最近毎月ひとつのテーマで特集する美術技法雑誌に衣替えしたが、四九年創立五〇周年を迎え、発行者北原義雄は「命ある限りアトリエを発行」の創刊の辞を誇りとしている。

(瀬戸慶久)

「アナキズム文学」(ハルマ) 文芸雑誌。昭和七・六・一一。全四冊。第二次「黒戦」の改題されたもの。編集発行人塩長五郎。黒戦社発行。創刊号は磯崎邦(塩)の「アナキズム文学の主要問題は何であるか」、ファシズム文学と対立しうる文学のアナキズムを説いた丹沢明(青柳優)の「ファシズム文学の本質」など。第二号には集团的社会的相互的な場としてのアナキズムを説く磯崎の「アナキズム文学は何かならずすべきであるか」ほか。

(秋山清)

「信天翁」(ハルマ) 同人雑誌。大正一四・六・一五・三。早大仏文科の学生を中心に英文、国文の学生を交えた同人雑誌。題名はボードレールの詩「アルバトロス」の邦訳だが、詩を主にした雑誌でもなく、孤高、脱俗の精神を作品に描くわけでもなく、抒情味を盛りこんだリアリズムの小説が多かった。浅沼悦を盟主に、井上英三、井上幸次郎、奥村実、小斉光雄、広瀬清、川島順平らが中心。井上英三の『石仏色吉の恋』が好評。第二号は発禁となる。七号で廃刊。

(川島順平)

「信天翁」(ハルマ) 同人詩雑誌。昭和三・一・一七。第五号まで確認。編集兼発行人伊藤整、河原直一郎。昭和二年九月の第